

新MADORIST

新MADORIST

これまでに設計した住宅の、間取りについて書こうと思いました。

家を考えるとき、誰しもまず間取りを考えますよね。どうしてでしょうか。それは、間取りは人の動きを表すからです。

逆に言うと、間取りによって人は動かされていると言ってもいいのかもしれませんが。

なんか凄いことだと思いませんか、知らず知らずのうちに、間取りに動かされているなんて…。

新聞広告の家の間取りをみても、勝手にいろんな想像が浮かんできます。

この部屋は、たぶんこう使うんだろうな。
またここは、室名以外にもこういう使い方もあるんじゃないか…などなど。

間取りからいろんな人の動きが想像できるのです。

そういうわけで、私たちも、家を設計するときには特に間取りにはこだわってきました。

まず、できるだけ部屋の名前から間取りを考えないようにしました。部屋の名前より、住む人がどのように動き、どのように生活するかから間取りを考えるように心がけました。

そうした結果、これまでに玄関のない家や、外なのか中なのかよくわからない軒下や、廊下がなくすべてが続き間など、ちょっと不思議な間取りの家ができあがります。

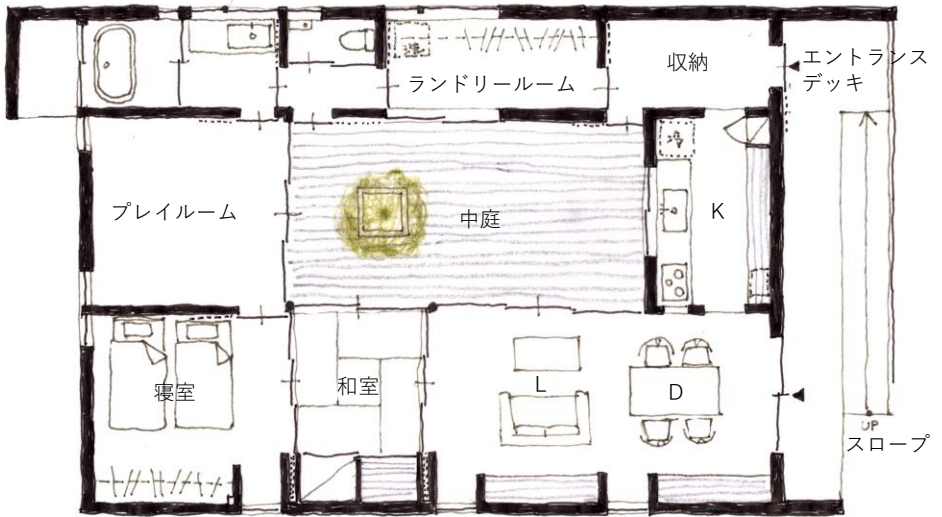
しかし、もちろんそれは奇をてらったわけではありません。あるがままに、住む人の生活を、動きを間取りに置き換えていった結果なのです。

この冊子には、これまでに設計した住宅の間取りを載せています。見る人がそれぞれ、どう使うのか想像を巡らせ、楽しんでいただければ幸いです。

阿久津友嗣

瀬戸市の住宅

2019年





この間取りには、2つの特徴があります。

ひとつは、中庭型の家であること。

もうひとつは、廊下がなく各部屋同士が、
続き間になっていることです。

なんだか昔の農家のようにどこか懐かしい間取りです。

ダイニング・リビングから和室、寝室、プレイルーム、
ランドリールーム、収納、キッチン、そしてまた、
ダイニング…とぐるぐる回ることができます。

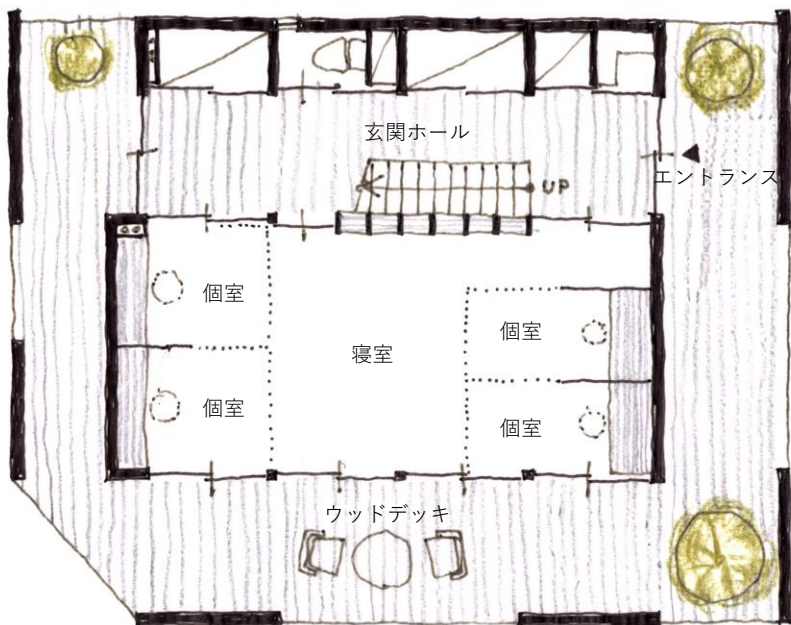
もし、急ぐときは迷わず中庭を横切りましょう。

四角く切り取られた空が迎えてくれます。

この家では外部である中庭も続き間なのです。

奈良法蓮町の住宅

2010年





こちらも、ぐるぐる回ることのできる間取り。
図面は1階の間取り図です。

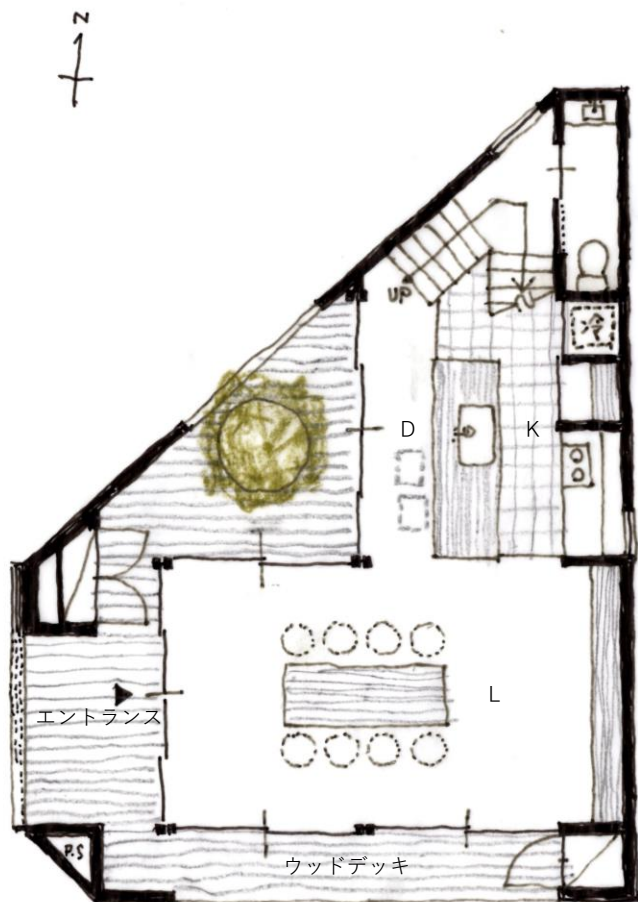
この家は眺めのいい2階にキッチン・ダイニングがあります。1階には寝室があるのですが、その寝室を取り巻くようにウッドデッキのテラスを巡らせ、寝室を中心にぐるぐる回ることができる動線です。

ウッドデッキのテラスは、寝室と庭をつなぐ緩衝帯（バッファー・ゾーン）になっていて、使い方に決まりはありません。自転車置き場だったり、お茶を飲んだり、子供たちが駆けっこをする場であったりします。

生駒の住宅

2

2008年





変形六角形の間取り。

好きで変形にしたわけではありません。そもそも敷地が変形なのです。

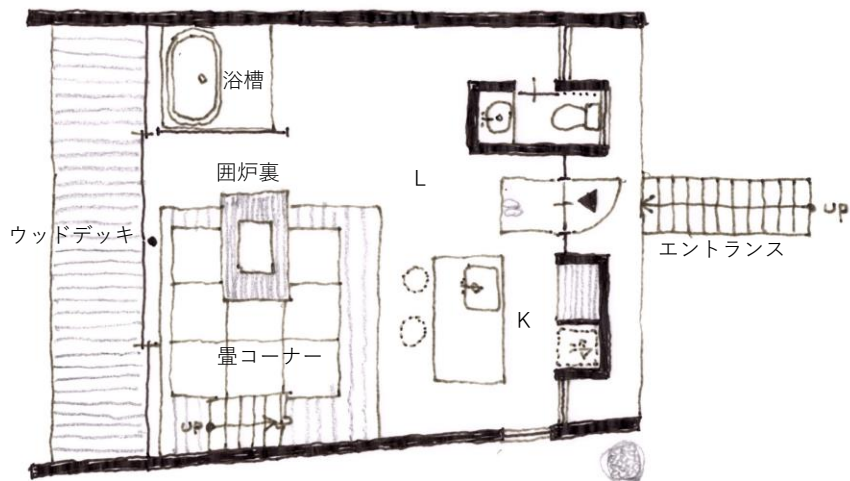
間取り図を見ると、室内なのか、外なのか、ちょっと分かりづらい間取りです。それもそのはず、それは、内と外とを同等に扱おうと考えているからです。

雨の多い日本では、昔から軒下を上手に使っていますよね。お寺もそうだし、住宅には濡れ縁という場所があります。

この家でも、屋外であるけれど、室内の延長として日常的に使うことのできるスペースを提案しました。

箕面森町の週末住居

2012年





なんと、リビングの中に浴槽がある間取り。
もちろん住宅でなく、週末住居だからなせるわざ。

建て主の熟年男性が、週末に雑木林を眺めながら、
ひとり過ごすための家です。

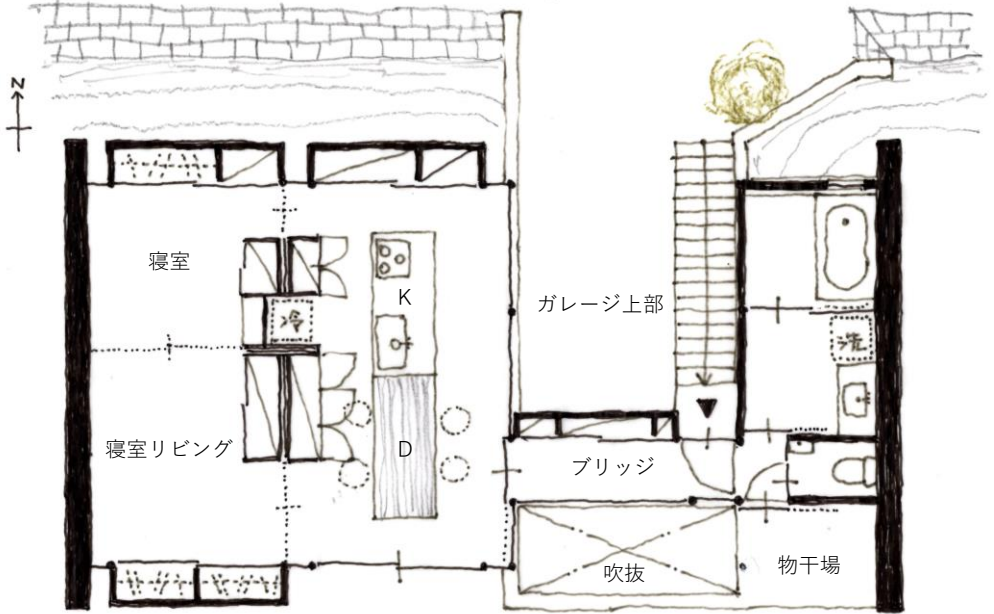
ワンルームの中に、キッチンやら、トイレやら、囲炉
裏付きの畳コーナーやらが散りばめられた間取り。
階段をのぼり2階が寝室になります。

雑木林に向かって大きなガラス窓があり、家のどこか
らも雑木林を眺められるようになっています。

オープンな浴室には上げ下げ式の目隠しをつけました。

富雄の住宅

2008年





地下に掘りぬきガレージがある平屋の住宅。

間取り図は、その1階。大きく左部分と右部分に分かれているのがわかります。左部分が居住スペース、右部分は浴室などの水回りスペースです。

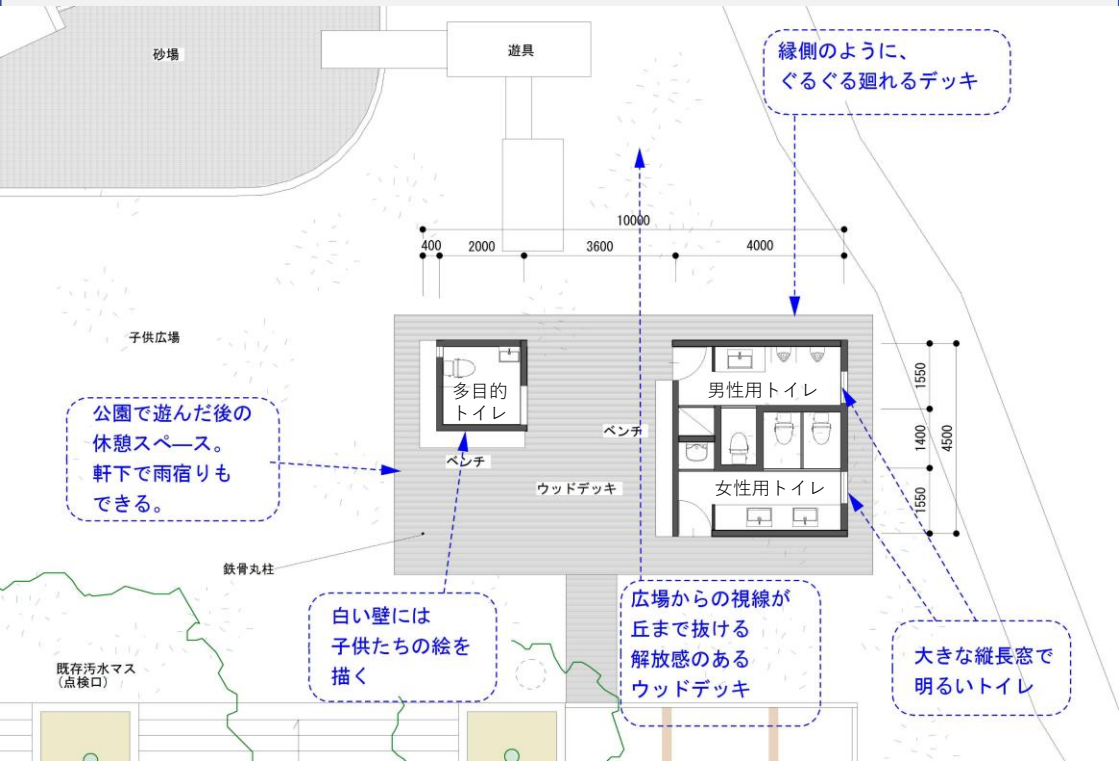
2つのスペースはガレージの上に架かるブリッジでつながっていて、ここに玄関があります。

居住スペースは中央の収納を中心にぐるぐる回れるワンルーム型ですが、必要に応じて引戸で区切ることもできるようになっています。

奈良市公園 トイレ

の提案

2020年





奈良市にある公園のトイレを提案しました。

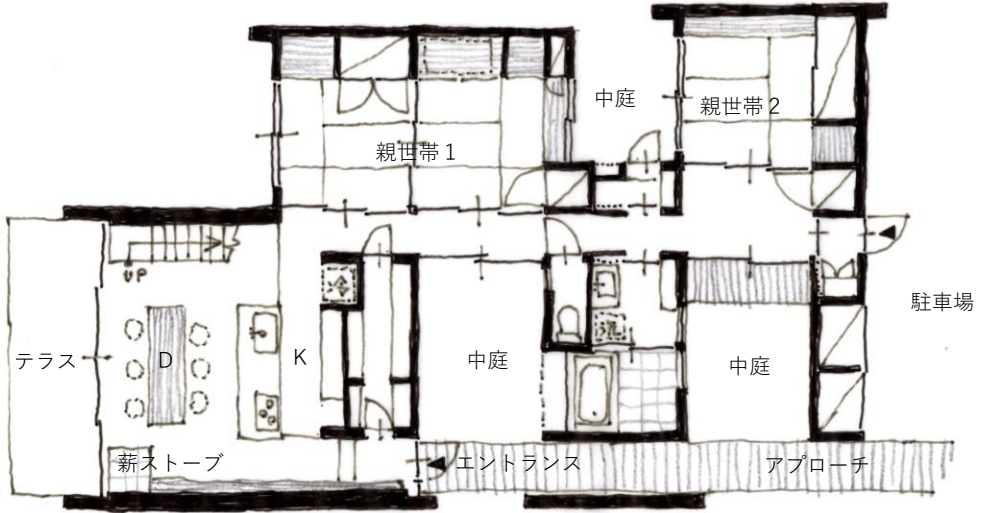
真っ先に考えたのが、「どういうトイレ」かではなく、公園には「どういう場所」があったらいいかなということ。

そこで、大きな屋根の下の雨宿りスペースがあれば、いろんな人が休んだり、集まったりできるのじゃないかと考えました。

全体がウッドデッキの床で、そこに軒の深い屋根をかけ、多目的トイレと男女のトイレを2つに分けて並べています。そこに休憩のできるベンチもつけました。

西白庭台の 住宅

2008年





どちらも一人っ子のご夫妻が、それぞれの親を呼んで、3家族いっしょに暮らそうというのがこの家のテーマ。

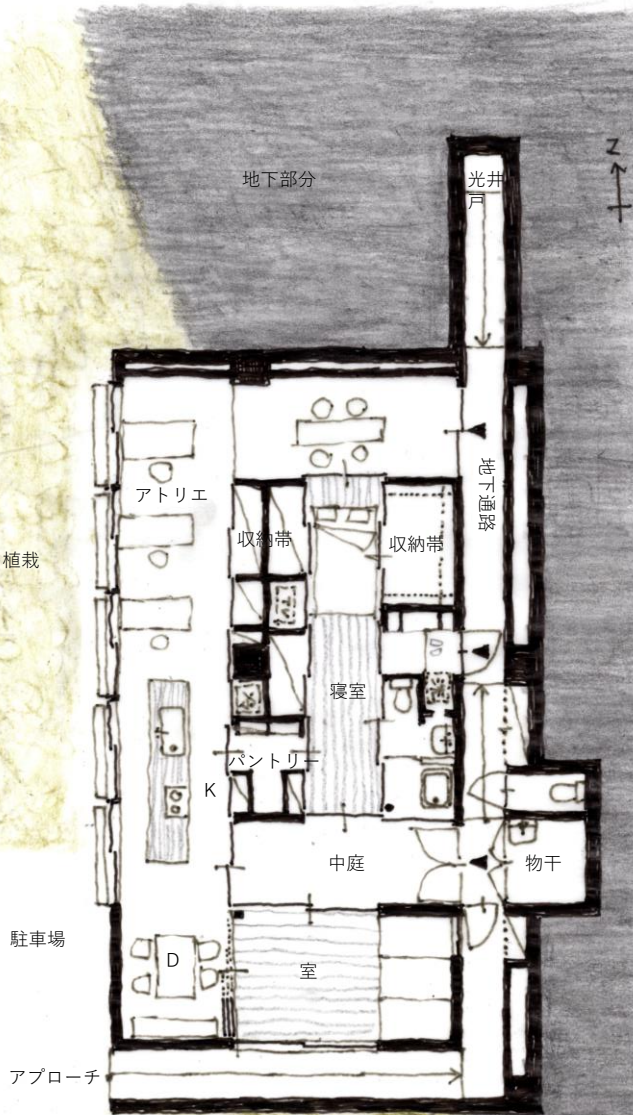
そのために建物を小さな単位に分けジグザグに並べ、2つの親世帯のスペース（和室）を離して配置しました。間には中庭をとり、プライバシーが確保できるようにしました。

一方、ダイニングやキッチン、水回りは共有にして家族全員で使います。夫妻の寝室は、ダイニングの吹抜の階段を上った2階に設けました。

ダイニングは掘りごたつ式。キッチンからは、料理をしながらテラス越しに生駒山を眺めることができます。

つなね2-01

2000年





最後は我が家《つなね2-01》の間取り。つなねコーポラティブ（集合住宅）の地下にあります。

実際は地下といっても斜面に埋め込まれた半地下で、間取り図のグレー部分がすべて地下になっていて窓が取れません。そこでいろいろ知恵を絞ります。

まず地下を貫通する地下通路を設け、光や風が入るよう「光井戸」まで伸ばします。こうすることで、湿気から室内を守り、ここを通路として使う動線としました。地下通路には3つの入口があります。

内部構成は、2つの《収納帯》によって、アトリエやキッチン、ダイニングなどのパブリック部分と、寝室や水回りのあるプライベート部分とを分けています。

あとがき

間取りについて何か書いてみようという気持ちは以前よりあった。しかし、なかなかその一歩が踏み出せずにいた。そうこうしているうちに20年近く利用していたホームページソフトが使えなくなり、新たに別のソフトでホームページをつくり変える必要に迫られ、ようやく2021年7月に新しいホームページへの切り替えが完了する。以前のホームページは40代前半に立ち上げたもので、その後の20年という歳月の中で、新しいホームページは今の自分の状況や気分により合ったものにしたいたいということ、そしてなにより以前より中身が分かりやすい構成にすることを心掛けようと思った。

MADORISTは、新しいホームページの1コンテンツとして2022年2月にアップする。間取りのことを書くには、まずは自分のホームページが一番ふさわしいと考えたからだ。これまでに設計した住宅の間取り図を使い、手短な解説文を加えた構成にして、写真は1作品1枚に限定。建物イメージより間取りのほうに意識がいくことを目論んだ。しかし、そのときはとにかく早くアップすることを優先したため、実施設計の平面詳細図をそのまま載せていて、当初考えていた“分かりやすさ”という点が疎かになってしまったという反省があった。

そして今回の新MADORISTになるわけだが、まず、図面をすべて手描きの間取り図に差し替え、余計な情報は消去してダイレクトに“間取り”が見るものに訴えかけるように工夫した。手描き図面のほうが、CAD図面よりはるかに気持ちが伝わりやすいというのは、この業界の常識のひとつ。これで大分雰囲気がやわ

らかくなったと思う。

あらためてこうして自分で設計した間取り図を並べてみると、やはりというか、いくつかの癖のようなものがあることに気づく。まずは、玄関らしい玄関がない間取りが多いということ。玄関という昔からある形式より、今の時代の生活に臨機応変に対応できる場所のほうが、家の“入口”として相応しいのではないかと思ったからだ。これは現代の家族構成の変化も大いに影響している。もちろん、「ちゃんとした玄関が欲しい」と言われる方にはちゃんとした玄関は設けています。ただ、玄関のためだけの玄関というのではなく、収納を兼ねたり、多目的に使える玄関を提案することが多いと思う。

次に半戸外、いわゆる軒下空間だ。これは冒頭でも書いたように日本建築の伝統的な手法で、雨の多い気候にうまく対応した空間となっている。西洋建築の場合、明快に屋内と屋外は分かれているが、日本の建物の場合、はっきりと屋内、屋外と言い切れない曖昧な空間が数多くあって、そしてこのことが日本の建築空間をより魅力的なものにする要因になっている。軒下空間のもうひとつのメリットは、使い方が自由であることだ。一番多いのは洗濯物干場だろうが、ここでお茶を飲んだり、食事をしたりと、使い手の工夫で無限の可能性を秘めた場所になるのも軒下空間の魅力である。

そして、続き間。一般的な住宅では、個々のプライバシーを確保するために“廊下”を通して個室（寝室）に行くような間取りになっている。その通路としてだけの廊下がいかにもったいないと考えたわけである。特にローコスト住宅の場合は面積も限られるため、通路にだけしか利用できないスペースをいか

に少なくするかで、リビングやダイニングの大きさもずいぶんと変わってくるものだ。ただ、乱暴に廊下を削るだけでは、プライバシーのない家となってしまう。ではどうするか。具体的には建て主家族と生活についていろいろ話し合い、どこまでオープンにできて、どこからはオープンにできないのかをヒヤリングしていく。かつてのように大人数の家族の場合は多少なりとも廊下は必要になってくるが、最近は夫婦ふたりだったり、子供がまだ小さいケースも多く、話し合うと、かなりオープンなプランが提案できる。じゃあ、わざわざ続き間にせず、いっそのこと全てワンルームでもいいのではという意見もあるだろう。確かに最近は全てワンルームと言っている住宅も見かける。では何故続き間なのかというと、これはそれぞれの設計者の考え方ではないだろうか。

連続テレビ小説などでは昔の祝言（結婚式）で、2間続きの座敷の建具を外し、大きなひとつの座敷として大勢で会食している場面を見かけるが、生活シーンによって建具で部屋を区切ったり、つなげたりとフレキシブルに使いわけるというのも日本建築の特徴のひとつだ。そういう緩やかな使い方ができる間取りは、今の時代にも十分に通用し、将来の家族の変化などにも柔軟に対応できる優れた方法なのではないかと思う。同じ間取りでありながら、ワンルームにも、あるいはいくつかの部屋に分けることもできるって、とても素敵なアイデアだと思いませんか。



魚釣りでは「フナに始まりフナに終わる」と言われるそうだ。

建築(住宅)も「間取りに始まり間取りに終わる」と言っているのかも知れない。もちろん建築は二次元の平面ではなく三次元の立体なので、間取り図以外に高さを決める断面図や、外観を決める立面図という図面があり、それらすべてでひとつの建築ができあがる。決して間取り図だけで建築ができているのではない。特に断面図は空間の高さやボリュームを司る重要な図面で、どんなにいい間取り図があったとしても、断面図を疎かにするといい建築にはならない。一般に“いい”建築とは、間取り(平面図)、断面図、立面図が高度なレベルで総合化された建築のことを言う。

しかしそれでもだ、やはり間取り図こそすべての図面の中で最重要だと言いたい。そう叫びたい。いい間取り図は美しい。そしていい間取り図を持つ建築は、かなりの確率でいい断面図といい立面図を併せ持っている。経験値的にそう言える。これは、いい建築の場合、前述した3つの要素(いい間取り図、いい断面図、いい立面図)を満たしているからに他ならない。つまり、いい間取り図はいい建築のバロメーターになるのだ。間取り図を見るだけで空間を想像できワクワクするのだ。どんな人でも家を考えるときはまず間取りを考える。これこそ間取り図がもっとも始まりの図面である証拠だ。そして設計者も全ての図面を総合した後、もう一度間取り図に戻って考えてみる。これで本当によかったのかと。間取りに始まり間取りに終わるのである…。

新MADORIST

TOMOTSUGU AKUTSU ARCHITECTS